

1 桂宮出土瓦当の研究

李 毓 芳
申 雲 艷

A はじめに

1950年代末から1960年代初頭にかけて、漢長安城考古隊は桂宮で初歩的な踏査とボーリングをおこなった。その後、1997年11月から2001年5月まで、中国社会科学院考古研究所と日本の奈良国立文化財研究所は、日中連合考古隊を共同で組織し、桂宮でボーリング調査と発掘調査を展開した。発掘調査では、合計545点の瓦当が出土した。本稿は、漢長安城桂宮から出土したこれらの瓦当について、初歩的な研究をおこなうものである。ただし、ほかの遺跡の瓦当と比較検討するために、漢長安城全体の瓦当を対象にした過去の分類方法は採用せず、桂宮出土瓦当単独での分類研究を進めることとする。

B 瓦当文様による分類

瓦当の文様からみて、漢長安城桂宮で出土した瓦当は無文瓦当、有文瓦当、文字瓦当の3類に大別される。3類に大別

i 無文瓦当

無文瓦当は3号建築遺構で1点出土したのみである。資料3:T4③:12は無文の半瓦当で、破損している。

ii 有文瓦当

有文瓦当は、桂宮で出土した瓦当の大多数を占めている。文様の種類には、葵文（旋曲文）、動物文、樹木文、渦文、雲文などがある。

ほとんどが
有文瓦当

葵文瓦当 瓦当中央に突線の太い縄状文が一周めぐり、その内外に葵文を飾る。桂宮2号建築・3号建築・4号建築から、1点ずつ出土している。瓦当の中央に太い縄状文が一周めぐり、その内側に三重線の表現による左向きの葵文を、外側に同じ三重線による右向きの葵文を飾るものもある。たとえば、4号建築で出土した4:T1③:64（第1図1）は、太い縄状文の内側に左向きの三重線葵文が4個、外側に右向きの三重線葵文が12個ある。瓦当径13.0cm、周縁の幅0.9cm、厚さ2.8cmである。また、3号建築で出土した3:T3③:17（第1図2）のように、瓦当中央に突線による圈線が一周し、その内側を三重線表現による右向き葵文、外側を左向きの三重線葵文で飾る瓦当もある。

動物文瓦当 主体文様として動物文を飾る。4号建築で出土した4:T1③:21(第1図3)は、中心文が半球形文で、その外側を圈線が二周する。界線により、瓦当は四つの区画に分けられ、各区画内に、翼を広げて飛翔する燕が1羽ずつ配される。瓦当径14.4cm、周縁の幅0.8~1.2cm、厚さ1.5cmである。

樹木文瓦当 主体文様として樹木文を飾る。3号建築出土の3:T1③:90(第1図4)は小片で、樹木文が一つだけ確認できる。

渦文瓦当 主体文様として渦文を飾る。2号建築で出土した2南:T4③:3は、1/4以下の小片。瓦当中央を圈線が一周し、その内側にX字形文がある。周縁の内側には圈線がさらに一周し、二重の界線が瓦当を4区画に区分する。各区画には、相対する渦文が1対ずつ配される。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.2cm、高さ0.6cm。糸切り痕が残る。瓦当径は、破損のため不明。周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.6cm。

雲文瓦当 主体文様が雲文のもの。円瓦当が大多数を占め、わずかに半瓦当が存在する。

雲文半瓦当 雲文半瓦当は6号建築から2点出土したのみで、同じ形態である。6:T1③:7は、瓦当の中心に格子文があり、その外側を2本の突線による圈線が半周する。周縁の内側にも突線による圈線が半周する。界線は二重線で表現され、左右の両区画には1個ずつの雲文を飾る。その内側には、中心文の圈線へと連続する単線がある。瓦当径16.7cm、周縁の幅1.3cm、瓦当中心部の厚さ1.0cm。丸瓦部の残存長28.5cm、内径13.1cm、凸面に中くらいから太めの縄目があるが、これらは複数回の叩きによるものである。最初は縦方向に叩き、次に右斜め方向に叩いている。縄目の幅は0.2cmで、瓦当に近い部分は、ケズリのため消されている。丸瓦部の成形は粘土紐作りで、内面に凹点文がある。

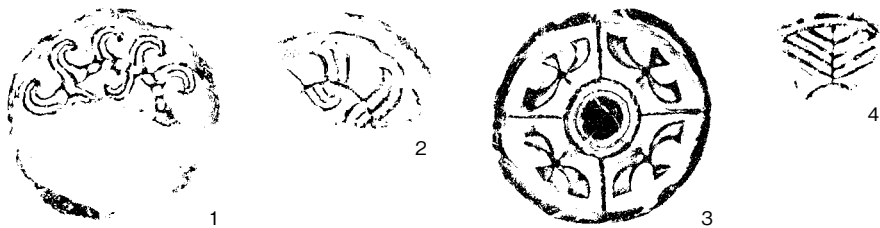
雲文円瓦当は瓦当の文様配置により、A~Fの6型に大きく分ける。

雲文瓦当
A型

A型は中心に四葉文を飾るもので、Aa~Adの4亜型に分かれる。

Aa型は、中心の四葉文の中央に小さな珠文が一つある。四葉文の外側を圈線が二周し、周縁の内側を圈線がさらに一周する。二重の界線により瓦当は四分され、いずれの区画内にも雲文を1個ずつ飾る。4号建築出土の4:T1③:8(第2図1)は、中心の四葉文が桃形を呈する。瓦当中央部の珠文と四葉の中央は凹む。瓦当径16.3cm、周縁幅0.7cm、厚さ2.9cm。

Ab型は、中心の四葉文の中に小さな珠文が一つあり、葉と葉の間にも小さな珠文を一つずつ配する。四葉文の外側で圈線が一周し、周縁の内側でも圈線が一周する。二重の界線により瓦当文は四分され、いずれの区画内にも雲文が一つずつ見られる。4号建築出土の4:T3③:45(第2図2)は瓦当径15.6cm、周縁幅1.2cm、厚さ2.2cm。



1: 葵文瓦当 2: 葵文瓦当 3: 動物文瓦当 4: 樹木文瓦当

第1図 桂宮出土の雲文以外の有文瓦当

Ac型は、四葉文の中央に小さな珠文が一つあり、葉と葉の間にも小さな珠文を一つずつ配する。四葉文の外側を圈線が二周し、周縁の内側にも圈線が二周する。周縁内側の圈線の間は、X字形文の文様帯を構成する。二重の界線により4区画に分けられ、各区画内には雲文を一つずつ配する。3号建築出土の3:T1③:54(第2図3)は、雲文の末端が外側を向いて界線と連なる。雲文の両側には三角形文が一つずつあり、雲文中央の上方と下方に小さな珠文を一つずつおく。瓦当面には朱が残る。瓦当径15cm、周縁幅1.1cm、厚さ2.4cm。

Ad型は、中心の四葉文が比較的小さい。その外側を圈線が二周し、間にX字形文をはさむ。周縁内側の圈線間にもX字形文を配する。二重の界線が瓦当面を4区画に分け、各区画内に雲文を一つずつ配する。2号建築出土の2北:T1③:14(第2図4)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.3cm、周縁幅1.0cm、厚さ2.3cm。

B型は中心に格子文を飾るもので、Ba~Bdの4重型に分かれる。

雲文瓦当
B型

Ba型の中心文は、圈線の内側を格子文ないし斜格子文で飾る。周縁の内側にも圈線が一周し、二重の界線により瓦当面は四分される。Ba I ~ Ba IVの4式に細分することができる。

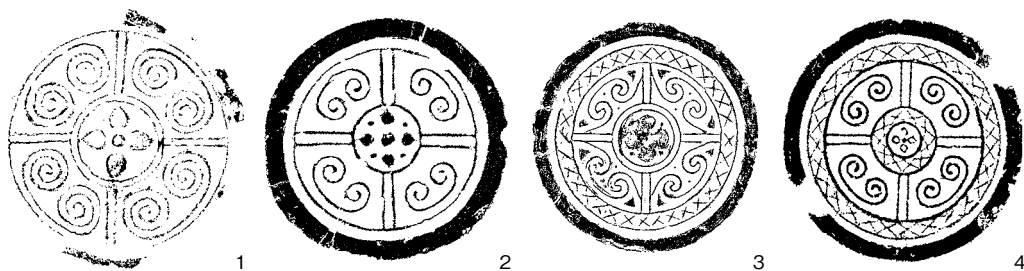
Ba I 式は、二重線の一端に雲文を飾る。2号建築出土の2北:T5③:21(第3図1)は、三重線が交錯して形成する斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.5cm、高さ0.4cmで、糸切り痕が残る。周縁幅1.4cm、周縁の高さ0.9cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は粘土紐で成形され、残存長12.7cm、内径12.7cm、厚さ1.4cmである。丸瓦の凸面には斜位の縄叩きがあり、瓦当に近い部分の縄目は磨り消されている。縄目の幅は0.4cm。凹面に凹点文(「麻点紋」)が残る。同種の瓦当は、東西路遺構と1号・3号・4号建築からも出土している。

Ba II 式は、瓦当にキノコ形雲文が飾られ、その末端は界線に連なる。2号建築出土の2北:T1③:16(第3図2)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.3cm、高さ1.1cmである。糸切り痕が残る。瓦当径15.4cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.8cm。3号建築下層排水渠からも、同種の瓦当が1点出土している。

Ba III 式は、瓦当の4区画の一つずつの雲文をもつ。2号建築出土の2北:T4③:14(第3図3)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.0cm、高さ0.7cmである。糸切り痕が残る。瓦当径14.7cm、周縁幅1.3cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.0cm。

Ba IV 式は四つの雲文を飾り、その内側にある1本の線は中心文と連続する。2号建築出土の2北:T1③:2(第3図4)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.2cm、高さ0.6cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.8cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.0cmである。

Bb型の中心文は、圈線の内側で横・縦・斜めの線が交錯し、三角形文を形成する。2号建築出



1 : Aa 型 2 : Ab 型 3 : Ac 型 4 : Ad 型

第2図 桂宮出土A型雲文瓦当

土の2北:T1③:42(第3図5)は、3条の横線・縦線と5条の斜線により形成された三角形文を中心に飾る。周縁の内側には圈線が一周する。二重の界線により瓦当は四分され、各区画内に雲文を1個ずつ飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.0cm、高さ0.2cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.8cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.5cmである。

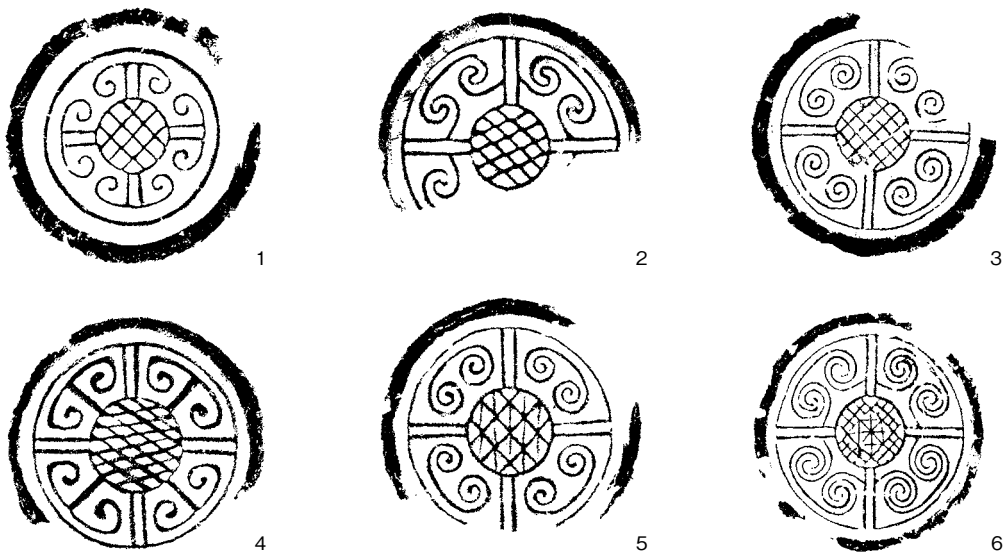
Bc型は圈線が中央で一周し、その内側を斜格子文で飾る。斜格子文の中央には米字形をおく。周縁の内側にも圈線が一周する。二重の界線が瓦当を四分し、各区画内に雲文を飾る。4号建築出土の4:T3③:26(第3図6)の雲文はキノコ形で、末端が界線に連なる。瓦当径14.5cm、周縁幅0.8cm、厚さ2.3cmである。同種の瓦当は、2号建築と7号建築でも出土している。

C型は、圈線が中央で一周めぐり、周縁の内側にも圈線が一周する。二重の界線が中心文を貫き、瓦当を四分する。中央の圈線の内側には、各区画内にL字形文を一つずつ飾る。Ca~Ceの5亜型に分かれる。

Ca型は、圈線で囲まれた中心文内に、単線によるL字形文を飾る。Ca I ~Ca Vの5式に細分することができる。

Ca I 式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T2③:18(第4図1)は瓦当径16.0cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.1cm。2北:T5③:16は瓦当径13.3cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.3cm。同種の瓦当は、1号・3号・4号・5号建築と下層排水渠、南門からも出土している。

Ca II 式は、瓦当面の各区画内にキノコ形文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:8(第4図2)は、雲文の末端が界線に連なる。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.1cm、高さ0.2cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.6cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.4cmである。1号建築出土の1:TG8③:13は、瓦当裏面に布目痕と糸切り痕が残る。瓦当径14.8cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.4cmである。



1 : Ba I 式 2 : Ba II 式 3 : Ba III 式 4 : Ba IV 式 5 : Bb 型 6 : Bc 型

第3図 桂宮出土B型雲文瓦当

CaⅢ式は、二重の界線の端部に一つずつ雲文を飾る。4号建築出土の4:T3③:10(第4図3)は、瓦当径16.0cm、周縁幅1.0cm、厚さ2.9cmである。同種の瓦当は、1号・2号建築からも出土している。

CaⅣ式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。雲文の内側には直線があり、中心文の圏線に連なる。2号建築出土の2南:T5③:55(第4図4)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.4cmである。同種の瓦当は7号建築からも出土している。

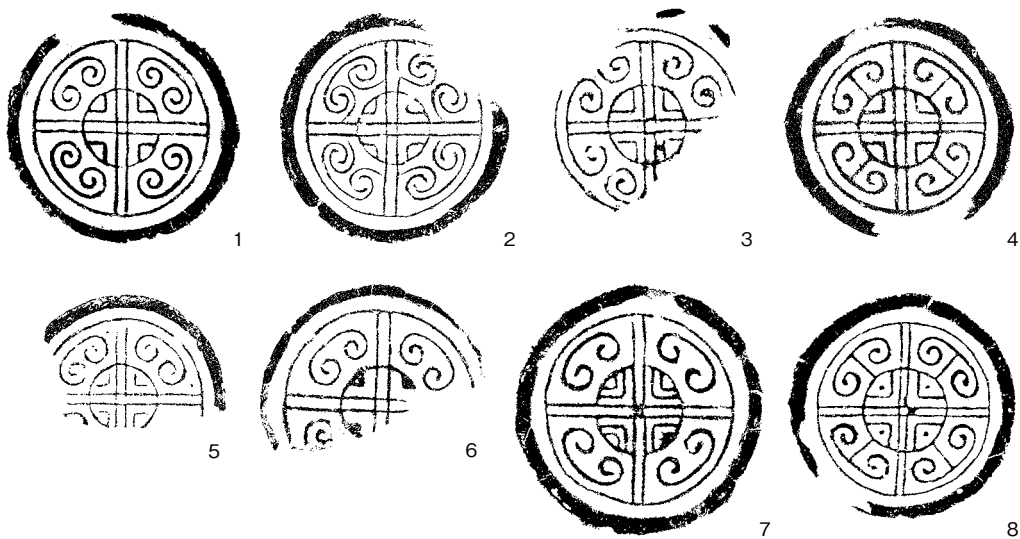
CaⅤ式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。雲文の両側に一つずつの小さな珠文がある。2号建築出土の2南:T8③:4(第4図5)は、瓦当裏面下半の突帯の幅2.2cm、高さ0.4cm。糸切り痕が残る。瓦当径14.4cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ1.7cm。

Cb型は、中心文に帯状のL字形文を配する。2号建築出土の2北:T5③:6(第4図6)は、中心文の外側に雲文を飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕はない。瓦当径15.6cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.9cm、厚さ2.6cm。1号建築でも同種の瓦当が1点出土した。

Cc型は、中心文に二重線によるL字形文を飾る。南門出土の南門:T1③:9(第4図7)は、雲文を四つ飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がある。瓦当径15.2cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.7cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は、残存長5.8cm、内径13.0cm、厚さ1.1cmで、凸面に斜位の縄叩きが残る。縄目の幅は0.4cm。丸瓦部凹面には布目痕があり、瓦当裏面にまで及んでいる。同種の瓦当は、1号・2号・4号建築からも出土している。

Cd型は、中心文に単線によるL字形文を配し、L字形文の内側に小さな珠文を一つずつ飾る。4号建築出土の4:T1③:96(第4図8)は、雲文を四つ飾る。雲文の内側には直線があり、中心文の圏線に連なる。瓦当径14.8cm、周縁幅0.9cm、厚さ2.1cm。

Ce型は、中心文に単線によるL字形文、L字形文の内側には帯状の三角形を一つずつ飾る。2号建築出土の2南:T1③:36は、瓦当面に四つの雲文を飾る。瓦当裏面下半の突帯の幅2.2cm、突帯



1 : CaⅠ式 2 : CaⅡ式 3 : CaⅢ式 4 : CaⅣ式 5 : CaⅤ式 6 : Cb型 7 : Cc型 8 : Cd型

第4図 桂宮出土C型雲文瓦当

の高さ0.5cm。糸切り痕がある。瓦当径15.5cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.4cmである。丸瓦部は残存長3.5cm、厚さ1.4cm。凸面の瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。凹面には凹点文がある。

Cf型は、瓦当の文様はCc型瓦当と基本的に同じだが、中心文の圏線が二重になっている。2号建築から1点出土したのみである。2南:T1③:30は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がある。瓦当径15.6cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ1.1cm、瓦当中心部の厚さ1.5cmである。丸瓦部は残存長14.0cm、内径13.0cm、厚さ1.3cm。凸面には縦位の縄叩きが見られるが、瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。縄目の幅は0.2cm。凹面には凹点文がある。

雲文瓦当型D

D型は、中心文に半球形文を一つ飾り、その周囲に圏線を一重から三重めぐらす。周縁の内側にも圏線が一重から二重めぐることが多い。中心文外側の圏線の間に小さな珠文を飾るものがあり、珠文には粗密がある。X字形文などが一周するものもある。周縁内側の圏線間には、X字が交互にV字を配した文様帯がめぐる。瓦当は二重の界線によって四分され、各区分内に雲文を一つずつ飾る。界線の端部に雲文を一つずつ飾るものもある。また、キノコ形雲文や、周囲に小さな珠文あるいは小さな三角形文を加えた雲文もある。瓦当の文様配置によって、Da~Diの9垂型に分けることができる。

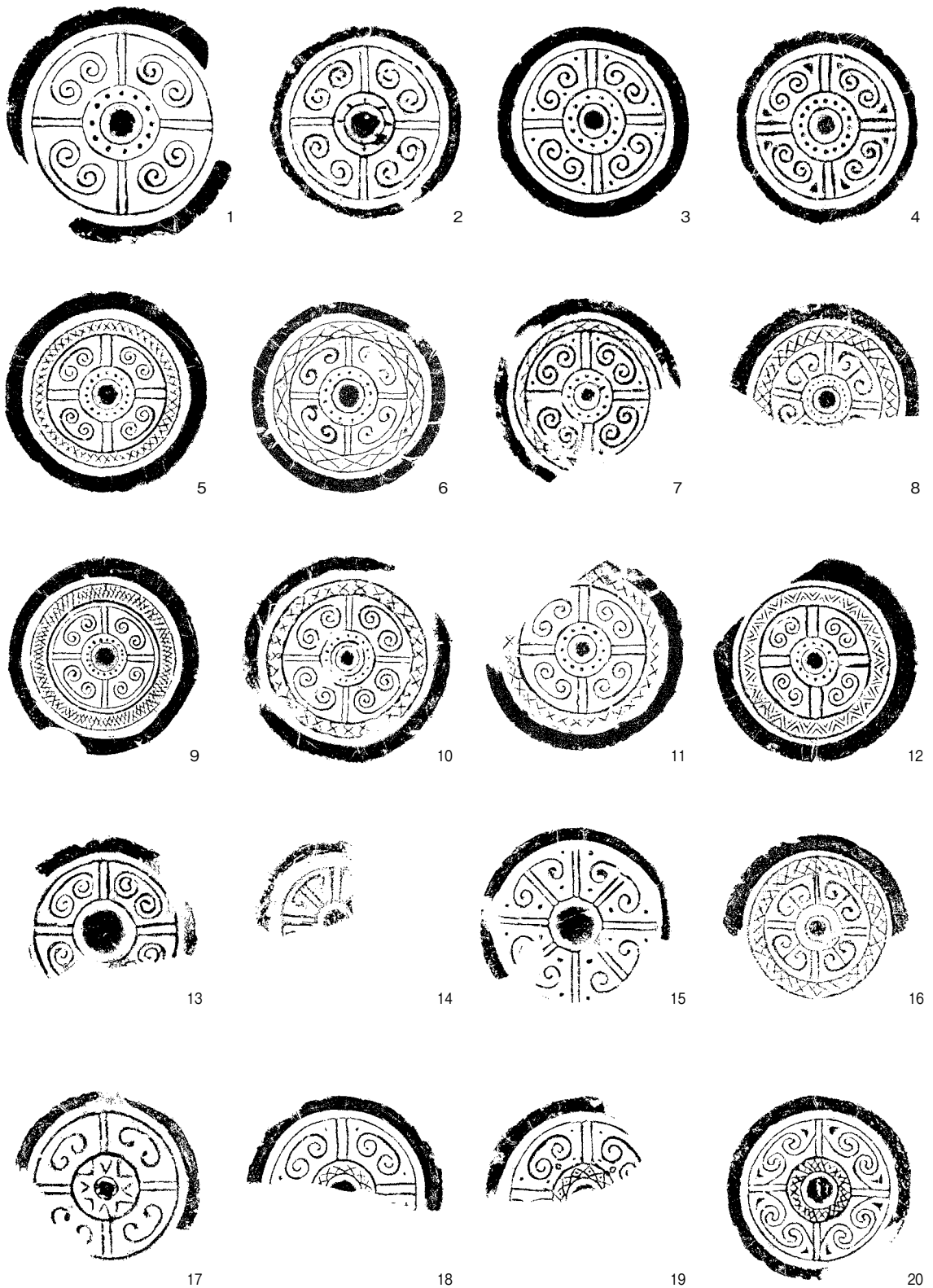
Da型は、半球形文の外側を連珠文が一周し、周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線によって四分され、雲文が一つずつ飾られる。Da I ~ Da IIIの3式に細分できる。

Da I 式は、雲文のそばに装飾がない。比較的大きなつくりのものには、中心文の周囲に二重の圏線がめぐり、その間に12個の珠文からなる連珠文が配される。4号建築出土の4:T4③:8(第5図1)は、瓦当径19.5cm、周縁幅1.8cm、厚さ2.3cm。比較的小型のものもあり、その中心文の周囲の二重圏線の間には8個の珠文からなる連珠文が配される。4号建築出土の4:T1③:87(第5図2)は、瓦当径15.5cm、周縁幅0.9~1.2cm、厚さ2.8cm。同種の瓦当が3号建築からも出土している。

Da II 式は、雲文の両側と内側に小さな珠文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:23(第5図3)は、中心文周囲の二重圏線の間には11個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面の中央には楕円形の凹みがある。瓦当径15.3cm、周縁幅1.4cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は、残存長24.0cm、内径13.6cm、厚さ1.6cm。凸面に縦位の縄叩きが見られ、瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。縄目の幅は0.3cm。凹面には布目痕がある。4号建築と5号建築出土の同種の瓦当は、中心文を二重に取り巻く圏線の間には、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当径はいずれも19.3cmに達する。2号建築出土の同種の瓦当は、中心文を二重に取り巻く圏線の間には、12個ないし15個の珠文からなる連珠文がある。3号建築からも同種の瓦当が出土しているが、連珠文の珠文数は11である。

Da III 式は、雲文の両側に三角形文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:20(第5図4)は、中心文を二重に取り巻く圏線の間には、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面中央に楕円形の凹みがあり、その外側には、周縁に沿って溝が半周する。瓦当径15.0cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.1cm。南門と3号建築からも同種の瓦当が出土した。

Db型は、中心の半球形文の周囲にある二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側にはX字形文がめぐる。瓦当面は二重の界線によって四分され、X字形文には粗密がある。



1・2 : Da I 式 3 : Da II 式 4 : Da III 式 5・6 : Dba I 式 7 : Dba II 式 8 : Dba III 式 9 : Dbb 型
 10 : Dbc 型 11 : Dc 型 12 : Dd 型 13 : De I 式 14 : De II 式 15 : Df 型 16 : Dg 型 17 : Dh 型
 18・19 : Di I 式 20 : Di II 式

第5図 桂宮出土D型雲文瓦当

Db_a型は、中心の半球形文の周囲にある二重圏線の間に連珠文が一周し、周縁の内側を二重にめぐる圏線の間には、X字形文が一周する。Db_aⅠ～Db_aⅢの3式に細分できる。

Db_aⅠ式は、瓦当面に雲文を飾る。2号建築出土の2北:T5③:7(第5図5)は、中心文の周囲をめぐる二重圏線の間に、16個の珠文からなる連珠文がある。X字形文は密である。瓦当裏面の中央には楕円形の凹みがあり、その外側には、周縁に沿って溝が半周する。瓦当径16.1cm、周縁幅1.5cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.7cm。2南:T7③:33(第5図6)は、中心文の周囲にある二重圏線の間に、13個の珠文からなる連珠文がある。X字形文は比較的疎らである。瓦当裏面の中央に楕円形の凹みがある。瓦当径14.9cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ3.5cm。同種の瓦当は1号・3号・4号・5号建築、南門、下層排水渠からも出土している。中心文周囲の連珠文の数は、9・11・12・16・18・20個とさまざまである。

Db_aⅡ式は、瓦当面に雲文を飾り、雲文の両側には珠文が一つずつある。2号建築出土の2北:T5③:3(第5図7)は、中心文周囲の二重圏線の間に、12個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面は平滑で、その中央には楕円形の凹みがある。瓦当径14.5cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.9cm。同種の瓦当は1号・4号建築、下層排水渠からも出土している。中心文周囲の二重圏線の間をめぐる連珠文の数は、9・10・12個とさまざまである。

Db_aⅢ式は、瓦当面の各雲文の内側から、中心文周囲の二重圏線に連なる直線が伸びる。4号建築出土の4:T3③:13(第5図8)は、中心文周囲の二重圏線の間に、19個の珠文からなる連珠文がある。瓦当径15.3cm、周縁幅1.6cm、厚さ2.2cm。

Db_b型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には、X字形文をはさむ二重圏線がめぐる。その内側に圏線がさらに一周する。4号建築出土の4:T1③:80(第5図9)は、中心文周囲の二重圏線の間に、18個の珠文からなる連珠文がある。瓦当面の4区画内には巻雲文が一つずつ飾られる。瓦当径15.5cm、周縁幅1.3～1.7cm、厚さ2.2cm。同種の瓦当は、2号・4号建築と南門からも出土している。中心文周囲の二重圏線の間をめぐる珠文の数は、12・13・16個とさまざまである。

Db_c型は、中心文周囲の二重圏線の外側に連珠文がめぐる。周縁の内側には、X字形文をはさむ二重圏線がめぐる。南門出土の南門:T1③:8(第5図10)は、中心文周囲の二重圏線の間に、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面に縄叩きがあり、ナデで消されている。瓦当径15.7cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。

Dc型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には外から順に、X字形文と圏線がめぐる。2号建築出土の2北:T1③:4(第5図11)は、中心文周囲の二重圏線の間に、12個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面の中央には縄叩き痕が残り、瓦当裏面周縁に沿って溝が半周する。瓦当径15.3cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.5cm。

Dd型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には、交互に向き合う二重のV字形文をはさむ二重圏線がめぐる。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。2号建築出土の2南:T5③:37(第5図12)は、中心文周囲の二重圏線の間に、12個の珠文からなる連珠文がある。二重の界線の間隔は比較的広い。四つの区画内に雲文を一つずつ飾る。瓦当径16.2cm、周縁幅1.6cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。

De型は、中心の半球形文が大きく、その外側を圏線が一周する。周縁の内側にも圏線がめぐる

る。瓦当は二重の界線により四分され、いずれの区画内にも雲文が飾られる。De I とDe II の2式に細分できる。

De I 式は、瓦当面各区画に雲文を飾る。2号建築出土の2南:T8③:34 (第5図13) は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.3cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.6cm。

De II 式は、雲文の内側から中心文の圏線に連なる二重線が伸びる。4号建築出土の4:T1③:23 (第5図14) は、全体に小々なつくりである。瓦当径13.2cm、周縁幅1.4cm、厚さ2.1cm。

Df型は、中心の半球形文が比較的大きく、その外側を圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。雲文の内側には二重線があり、中心文の圏線に連なる。雲文の両側と内側には、小さな珠文を一つずつ飾る。3号建築出土の3:T2③:36 (第5図15) は、瓦当径15.3cm、周縁幅1.2cm、厚さ2.2cm。

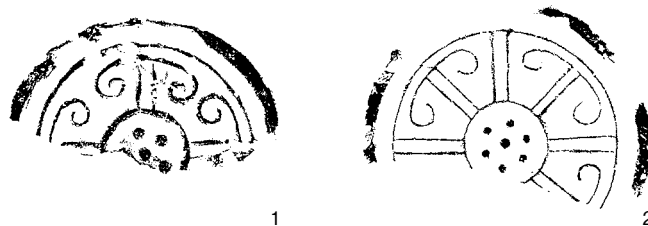
Dg型は、中心の半球形文の外側に二重の圏線、周縁の内側にもX字形文をはさむ圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。各雲文の内側からは、中心文の圏線に連なる短い直線が伸びる。2号建築出土の2南:T8③:14 (第5図16) は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.5cm、周縁幅1.5cm、周縁の高さ0.3cm、厚さ2.0cm。

Dh型は、中心の半球形文の外側に圏線がめぐり、内側には四つのL字形文とその中間にV字形文を配する。周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。2号建築出土の2南:T6③:30 (第5図17) は、瓦当裏面に縄叩き痕が残り、丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.6cm。

Di型は、中心の半球形文の外側に、X字形文をはさんで二重の圏線がめぐり、周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。Di I とDi II の2式に細分することができる。

Di I 式は、中心の半球形文の外側に、珠文をはさむX字形文がめぐる。2号建築出土の2北:T1③:15 (第5図18) は、瓦当の各区画内にある雲文の両側に、珠文を一つずつ飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径16.0cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.3cm。2北:T1③:18 (第5図19) は、中心文周囲に葉形文が一つずつ見られる。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.2cm。

Di II 式は、中心の半球形文の外側に、X字形文をはさむ二重の圏線がめぐる。瓦当の各区画内にはキノコ形雲文が飾られる。雲文の端部は、両側に伸びて界線に連なり、雲文の両側と上方に、三角形文が一つずつ飾られる。4号建築出土の4:T1③:84 (第5図20) は、瓦当径15.2cm、周縁幅1.1~1.8cm、厚さ2.5cm。同種の瓦当は3号建築からも出土している。



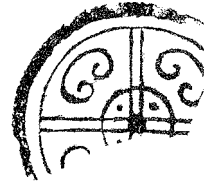
1 : Ea型 2 : Eb型

第6図 桂宮出土E型雲文瓦当

雲文瓦当
E型

E型は、中心に圈線がめぐり、その内側に珠文を多数飾る。また、周縁の内側にも圈線が一周する。EaとEbの2型に分けることができる。

Ea型は、二重線の端部に雲文を飾る。2号建築出土の2南:T1③:9(第6図1)は、中心文に7個の珠文を飾る。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径16.7cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.7cm、中心部の厚さ1.2cm。



第7図 桂宮出土F型雲文瓦当

Eb型は瓦当面が二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。各雲文の内側からは、中心文の圈線に連なる二重線が伸びている。2号建築出土の2南:T1③:51(第6図2)は、中心文に7個の珠文がある。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.5cm、高さ0.5cm。糸切り痕が残る。瓦当径17.6cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.9cm。

雲文瓦当
F型

F型は、中心文と周縁の内側にそれぞれ圈線がめぐり、瓦当面は、中心文を貫く二重の界線により四分される。中心文には珠文が配され、その外側には雲文が飾られる。2号建築出土の2南:T8③:42(第7図)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径16.0cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.7cm、中心部の厚さ1.8cm。

iii 文字瓦当

文字瓦当の銘文の内容は、吉祥句が多いが、官署建築物の名称もある。たとえば、「長生無極」「長生未央」「千秋萬歳」「與天無極」「延年益壽」「右空」などである。

「長生無極」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「長生無極」の4字がある。中心文は、半球形の外側に、連珠文をはさむ二重の圈線がめぐり、周縁の内側にも、圈線が一、二周する。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。2号建築出土の2北:T8③:9(第8図1)は、中心文の周囲に、12個の珠文からなる連珠文をはさんだ二重の圈線がめぐり、瓦当裏面は平滑で、丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径17.7cm、周縁幅1.8cm、周縁の高さ0.6cm、瓦当中心部の厚さ2.8cm。2南:T4③:6は、「生」の1字だけ残存している。周縁の内側に二重の圈線がめぐり、「長生無極」瓦当は3号・4号建築からも出土した。

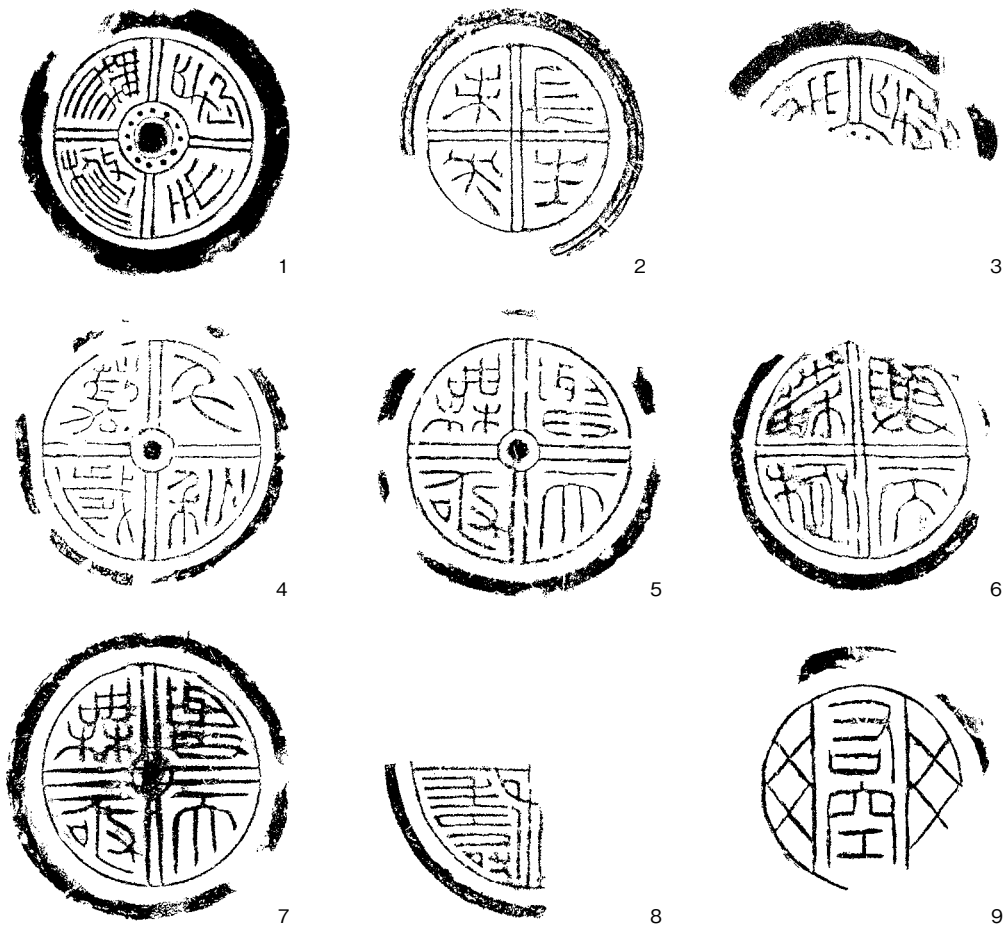
「長生未央」瓦当 瓦当面に陽文による「長生未央」の4字がある。周縁の内側に圈線が一周するものもある。瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。3号建築出土の3:T2③:27(第8図2)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径15.5cm、周縁幅1.1~1.5cm、厚さ3.1cm。中心文の周囲には圈線と連珠文帯がめぐり、周縁の内側にさらに一重の圈線がめぐり、瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分され、各区画内に文字が一つずつ配される。4号建築出土の4:T4③:3(第8図3)は、「長」「未」の2字のみが残存する。周縁幅1.8cm、厚さ2.5cm。

「千秋萬歳」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「千秋萬歳」の4字がある。中心の珠文の外側と周縁の内側に、それぞれ圈線がめぐり、瓦当面は、二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。3号建築出土の3:T1③:86(第8図4)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径18.0cm、周縁幅1.0cm、厚さ3.5cm。2号建築出土の2北:T2③:4は、「千」「萬」の2字のみが残存する。瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径約18cm、周縁幅1.3cm。

「與天無極」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「與天無極」の4字がある。中心の珠文の外側と周縁の内側に、それぞれ圈線がめぐるものもある。瓦当面は、二重の界線により四分され、各区画内に文字が一つずつ配される。3号建築出土の3:T1③:41(第8図5)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径19.0cm、周縁幅1.1cm、厚さ2.4cm。4号建築出土の4:T3③:22(第8図6)は、瓦当径17.6cm、周縁幅0.9~1.1cm、厚さ2.4cm。下層排水渠出土の3:排水渠:7(第8図7)は、瓦当径18.8cm、周縁幅1.0cm、厚さ4.1cmである。

「延年益壽」瓦当 中心文と周縁の内側にそれぞれ圈線がめぐる。瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分される。中心文内には、L字形文が一つずつ配される。3号建築出土の3:T2③:1(第8図8)は、「壽」の1字のみが残存する。周縁幅1.2cm、厚さ2.9cm。

「右空」瓦当 周縁の内側に圈線がめぐる。瓦当面は、2本の線により、中央と左右の区画に分けられる。中央の区画には、上から下へ陽文の篆書で「右空」とある。左右の両区画にはX字形文を飾る。2号建築出土の2北:T8③:5(第8図9)は、瓦当裏面に糸切り痕が残る。瓦当径約18cm、周縁幅1.6cm、周縁の高さ0.7cm、厚さ2.3cm。



1:「長生無極」瓦当 2・3:「長生未央」瓦当 4:「千秋萬歳」瓦当 5~7:「與天無極」瓦当
8:「延年益壽」瓦当 9:「右空」瓦当

第8図 桂宮出土文字瓦当

C 出土瓦当の内訳と文様の類例

出土瓦当の内訳 漢長安城桂宮から出土した大量の瓦当は、桂宮の造営および使用年代を研究するうえで重要な参考資料となる。1997年11月から2001年5月の発掘調査で出土した545点の瓦当は、円瓦当と半瓦当に分けられるが、うち円瓦当が542点と、瓦当総数の99.4%を占めた。半瓦当は3点で、瓦当総数の0.6%にすぎない。

瓦当は、文様により、無文瓦当、有文瓦当、文字瓦当に分けることができる。内訳は、無文瓦当が1点(0.2%)、有文瓦当が496点(91.0%)、文字瓦当が48点(8.8%)である。

雲文瓦当
が大多数

また、有文瓦当のうちでは雲文が最も多く、計489点と、瓦当総数の98.6%を占める。このほかには、葵文、樹木文、動物文、渦文瓦当が少量見られる程度である。

文字瓦当では「長生無極」が18点と最も多く、それに次ぐのは「與天無極」10点と「千秋萬歳」9点であった。これ以外に「長生未央」「右空」「延年益壽」などが少量あり、文字が判別できないか不完全なものが7点ある。

雲文以外の有文瓦当の類例 漢長安城桂宮で、雲文瓦当以外の有文瓦当が占める割合は、瓦当総数の1.3%にすぎない。これは、前漢初年に建てられた未央宮の宮城西南角楼で出土した雲文以外の有文瓦当が、瓦当総数の21%であるのに比べ、大幅に減少している。

桂宮出土の、中心に太い縄状文と葵文を飾る瓦当は、漢長安城未央宮の西南角楼出土の葵文瓦当と基本的に同じ文様である。ただし、未央宮西南角楼出土の葵文瓦当は、縄状文の内側に三重線の葵文が右向きに、その外側は左向きに配されている。また、桂宮出土の燕文瓦当は初めて発見されたものだが、燕はいずれも頭を中心に向け、翼を広げて飛び立とうとしており、ひじょうに生き生きとしている。

豊富なバリエーション

雲文瓦当の類例 雲文は、桂宮で最も普遍的な瓦当文様であり、そのバリエーションはきわめて豊富である。

中心に四葉文を飾るA型の雲文瓦当は、先秦時代の山東省曲阜魯国故城遺跡ですでに発見例がある。その後、漢代になると、関中地区で比較的流行したが、河南省や河北省などでも出土している。Aa型は、かつて河北省邯鄲の漢代建築遺構から出土したことがあるが、その雲文はキノコ形であった。Ab・Ac・Ad型は、今のところ桂宮でしか見られない。陝西省臨潼魚池遺跡、澄城良周漢建築遺構、淳化甘泉山董家村漢代建築遺構で、Ab型とよく似た雲文瓦当を出土したことがあるが、中心の四葉文に珠文はない。

中心文内に斜格子文を飾るB型の雲文瓦当は、陝西省、河南省、山東省などの戦国時代の建築遺構から数多く発見されている。桂宮出土のこの型の瓦当は、中心部の圏線の中に格子文・斜格子文・三角形文などを飾り、雲文の様式もより豊富になっている。BaⅠ式は、陝西地区の秦漢建築遺構でよく見られる瓦当様式である。BaⅡ式は、河南省登封の東周陽城遺跡で出土したことがある。BaⅢ式は、陝西省臨潼芷陽韓峪郷の秦東陵2号建築遺構で出土例がある。しかし、中心の斜格子文はより密である。BaⅣ式は、今のところ桂宮でしか見られない。Bb型の中心部の文様と基本的に同じ雲文瓦当は、陝西省臨潼の秦代櫟陽城で出土しており、Bc型は陝西省淳化の雲陵園遺跡で出土例がある。

第1表 桂宮出土瓦当一覧

瓦当文様	型式	1号 建築	2号 建築	3号 建築	4号 建築	5号 建築	6号 建築	7号 建築	南門	東西 道路	排水 渠	計
無文半瓦当				1								1
葵文瓦当			1	1	1							3
樹木文瓦当				1								1
動物文瓦当					1							1
渦文瓦当			1									1
雲文半瓦当							2					2
雲文瓦当	Aa				1							1
	Ab				1							1
	Ac			1								1
	Ad		2									2
	Ba I	1	1	2	2					2		8
	Ba II		2								1	3
	Ba III		1									1
	Ba IV		2									2
	Bb		1									1
	Bc		2		1			1				4
	Ca I	8	65	23	66	1		2	1		1	167
	Ca II	1	2									3
	Ca III		1		1							2
	Ca IV		1									1
	Ca V		1									1
	Cb	1	2									3
	Cc	2										2
	Cd				1							1
	Ce		1									1
	Cf		1									1
	Da I			5	11				1			17
	Da II		21	1	1	2						25
	Da III		6	1								7
	Dba I	1	12	23	16	2			2		2	58
	Dba II	2	4		1			1			1	9
	Dba III		1		1							2
	Dbb		3	4	10							17
	Dbc								1			1
	Dc		1									1
	Dd		6									6
	De I		2									2
	De II				1							1
	Df			2								2
	Dg		1									1
	Dh		2		1?							3
	Di I		2									2
	Di II			2	1							3
	Ea		1									1
	Eb		2									2
	F		1									1
「千秋萬歳」瓦当			8	1								9
「長生無極」瓦当			16	1					1			18
「長生未央」瓦当				2	1							3
「與天無極」瓦当			3	5	2				2		2	14
「延年益壽」瓦当				1								1
「石室」瓦当			1					1				2
計		16	180	77	121	5	2	5	8	2	7	423

型式不明の瓦当は含んでいない。また、たんに瓦当とあるものは円瓦当を示す。

雲文瓦当
C型

二重の界線が中心文を貫き、その内側にL字形文を飾るC型の雲文瓦当は、桂宮での出土量が比較的多い。CaⅠ式は最も多く、2号・3号・4号建築から大量に出土したほか、1号・5号建築、南門、下層排水渠でも発見された。同種の瓦当は、陝西省の戦国から秦代の咸陽1号宮殿で見られ、漢代になっても陝西省西安・臨潼・藍田・華陰・淳化・鳳翔などの建築遺構から比較的多く出土している。また、河北省石家荘と定州でも出土例がある。CaⅡ式は、今のところ1号・2号建築で2点ずつ出土しただけである。CaⅢ式は、1号・2号・4号建築で1点ずつ出土している。同種の瓦当は、かつて陝西省淳化雲陵陵園、華陰京師倉遺跡で出土したものの、発見例は比較的少ない。CaⅣ式は、未央宮中央官署遺跡で出土例がある。CaⅤ式とCb・Cc・Cd・Ce型は比較的少ないが、Cd・Ce型は未央宮西南角楼で出土したことがある。

雲文瓦当
D型

中心文が半球形文であるD型の雲文瓦当は、桂宮で数多く発見されている。DaⅠ式はおもに4号建築で出土し、全体のつくりが大きめのものと小さめのものがある。同種の瓦当は平陵陵園でも出土例がある。DaⅡ式はおもに2号建築で出土したが、3号・4号・5号建築でも発見されている。また、未央宮椒房殿でも同種の瓦当がかつて出土した。DaⅢ式はおもに2号建築で出土しているが、漢長安城窯址にも出土例がある。周縁の内側にX字形文を配するDb型は、桂宮で比較的多く発見されている。DbⅠ式は2号・3号・4号建築でいずれも少なからず出土している。陝西省咸陽の渭陵陵園、咸陽北二道土原の後漢墓の墓道充填土中からも1点ずつ出土したことがある。DbⅡ・DbⅢ式とDbb・Dbc・Dc・Dd型は、現在のところ、桂宮で出土したのみである。DeⅠ式は、2号建築で2点出土しただけである。同種の瓦当は、未央宮少府（あるいは所轄官署）遺構における早期の堆積中から、かつて出土したことがある。DeⅡ式は4号建築で1点出土したのみである。Df型は桂宮3号建築で2点出土したが、この建築特有の種類である。Dg・Dh・Di型は、2号建築以外に出土例がなく、2号建築特有の種類である。

中心文に珠文を数多く飾るE型の雲文瓦当は、河南省登封の東周陽城遺跡から出土したことがある。2号建築出土のEa型は、未央宮前殿A区に出土例がある。Eb型は、今のところ桂宮2号建築で見られるのみである。未央宮椒房殿で、かつてEb型とよく似た雲文瓦当が出土したが、雲文の内側から圏線に至る線は単線であり、二重線ではない。

F型雲文瓦当は、現在のところ桂宮2号建築でしか見られない。

文字瓦当の類例 漢長安城桂宮出土の「長生無極」瓦当は、おもに2号建築で出土したが、3号・4号建築からも1点ずつ出土した。この種の瓦当は、陝西地区の漢代遺跡に多く、漢長安城未央宮前殿・椒房殿・武庫、漢長安城西北郊窯址、杜陵陵園、渭陵陵園、平陵陵園、華陰京師倉遺跡、淳化漢洪崖宮遺跡、鳳翔雍城遺跡、鳳翔凹里漢代建築遺構などから出土しており、文様も基本的に同じである。

「長生未央」瓦当は、前漢の陝西地区で最もよく見られる文字瓦当だが、桂宮出土瓦の文様は、ほかの地域のものとは異なっている。中心文を貫通する二重の界線が瓦当面を四分し、中心文の圏線の内側を一重の連珠文がめぐる様式は、今のところ桂宮でしか見られない。

「千秋萬歳」瓦当はおもに2号建築から出土しており、瓦当文様の配置や文字の書き方は、陝西省華陰京師倉遺跡出土の「千秋萬歳」瓦当と完全に一致する。しかし、後者は全体的にやや小ぶりで、瓦当径は12.4cmしかない。

3号・4号建築および下層排水渠から出土した「與天無極」瓦当は、過去に陝西地区の漢代建

築遺構から少なからず発見されている。

「延年益壽」瓦当は、漢長安城、神木瑤鎮漢代建築遺構、長安窩頭寨漢代錢范出土遺跡、盧県兆倫漢代鑄錢遺跡などから出土している。そのほかの地区では、中心文に圈線がめぐるものは見られない。桂宮3号建築からは、二重の界線が中心文とその周囲の圈線を貫通し、中心文内にL字形文を飾る瓦当が出土している。

「右空」瓦当は、現在のところ、桂宮2号建築でのみ見られる。

D 軒丸瓦の製作技法

桂宮出土の瓦当はいずれも型作りで、范を用いて瓦当を成形した後に、丸瓦の製作と接合をおこなう。また、3号建築では、雲文瓦当の范が1点発見されている(3:T1③:84)。瓦当面は二重線で四分され、各区画内に雲文を飾る。周縁の内側には圈線がめぐる。これから瓦当径を復元すると、16.4cmとなる。

雲文瓦当范

桂宮出土軒丸瓦の製作・接合方法は、おもに四つに分けられる。

製作技法で
四つに分類

第一の方法では、范にのせた瓦当の裏面上に、粘土紐で円筒を成形する。このとき、模骨は用いない。その後、円筒の半分を切り離す。この方法によって作られた瓦当の裏面には、丸瓦の断面に沿って通された糸の痕跡が残る。瓦当裏面下半に突帯も残るが、突帯上には糸切り痕がある。瓦当裏面と丸瓦の内側に粘土紐を足して接合を補強した痕跡は見られない。

第二の方法は、范にのせた瓦当の裏面上に、模骨を用いて円筒を成形し、模骨を取りはずした後、円筒の半分を切り離す。このようにすると、丸瓦の断面に沿って糸を通した痕跡が残る。糸切り痕をとまなう突帯が瓦当裏面下半に形成される。瓦当裏面と丸瓦の内側に粘土紐を足して接合を補強した痕跡は見られない。また、瓦当裏面には、長方形か馬蹄形の突起あるいは布目痕が部分的に見られる。

第三の方法は、范にのせた瓦当の裏面に、別作りの円筒を接合した後、円筒の半分を切り離す。この方法で作られた瓦当の裏面と接合した丸瓦の凹面側には、補強のために粘土紐を一周貼り付けた痕跡が残る。また、瓦当裏面には、丸瓦の断面に沿って糸を通した痕跡が残る。糸切り痕をとまなう突帯が瓦当裏面下半に形成される。

第四の方法は、范にのせた瓦当の裏面に、円筒から半分切り離した成形済みの丸瓦を直接接合する。この方法で作られた瓦当裏面と接合した丸瓦の凹面側には、補強のために粘土紐を半周貼り付けた痕跡が残る。瓦当裏面には、糸を通した痕跡や糸切り痕は残らない。

なお、桂宮出土瓦当の観察によれば、糸による切り離しには二通りある。一つは糸の一端を固定し、別の一端を引きながら、半円を描くように円筒の半分を切り離す方法である。もう一つは、糸を粘土円筒に貫通させ、切り離したい円筒の外側に糸の一端を密着させながら、もう一端まで回しこみ、その端部を引っ張ることで円筒の半分を切り離す方法である。

切り離し法
は二通り

E おわりに

桂宮の発掘調査で出土した遺物は、いずれも前漢中期から後期にかけてのものであり、『三輔

黄図』の「桂宮、漢武帝造」という記載と一致している。また、各建築遺構から瓦当が出土したが、これは瓦当が桂宮の建物にごく普遍的に使われていたことを物語る。とくに2号・3号・4号建築からは多量の瓦当が出土しており、かつ種類も豊富である。

3号建築は倉庫建築であり、出土瓦当のうち、有文瓦当はCa I 式とDb a I 型の2種類の雲文瓦当、文字瓦当は「與天無極」が主体であった。4号建築は、皇后や皇妃が宮廷関連の活動に宮中で従事するための補助施設および居住区であり、瓦当はやはりCa I 式とDb a I 型雲文瓦当が主体であった。2号建築は、必要な施設が完全に揃った宮殿建築群といえ、漢の武帝が皇后や皇妃のために造営した重要な宮殿建築である。2号建築の出土瓦当は、有文瓦当ではC型とD型の雲文瓦当が最も多く、文字瓦当では「長生無極」が主体であった。これは、未央宮椒房殿と漢宣帝王皇后陵で発掘された東門・寝殿から出土した文字瓦当がおもに「長生無極」瓦当であった状況と共通する。また、「千秋萬歳」瓦当は2号建築で最も多く発見され、今のところ、2号建築と4号建築でしか見つかっていないことが注目される。これらは、そうした建物に特有の瓦当として、建物の独自性を示すものといえよう。